

3 頭無遺跡出土の細石刃文化石器群について

小林達雄（國學院大學教授）

（１）

旧石器時代文化は、三時期に大別される。即ち第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期である。頭無遺跡の遺物群は、この第Ⅲ期のいわゆる細石刃インダストリーに所属する。日本列島の殆ど全域を席捲した細石刃インダストリーは、その細石刃を作り出す技法によって、システムＡとシステムＢの二つの流れに区別されるが、とくにシステムＡは北海道からシベリア大陸、アラスカ方面にも広く分布が認められている。本州においても、山形県から新潟県にいたる日本海側に安定した内容の存在が知られ、さらにその系統をひくと推定される石核は富山県に及んでいる。一方、太平洋側では茨城県の後野遺跡を南限とし、さらに群馬、埼玉、神奈川県下に、そのシステムＡの系統の流れが知られていた。そして最近、千葉県佐倉市佐倉工業団地予定地内に、システムＡの安定した内容が発見され、さらに南に下ることが明らかにされたのである。

こうした状況下にあって、本頭無遺跡の石器群はシステムＡ、太平洋海岸地方のみならず、内陸部においても内容をそのまま維持して南に広がっていたことを示すものとし重要である。

つまり、頭無遺跡は旧石器時代第Ⅲ期において、システムＡの分布圏の南限界線が関東地方から新潟県方面を網羅する地域であることを明らかにした。なお、そのシステムＡの系統をひくか、あるいはそのシステムＡと関係、交渉をもって細石刃製作の技法の上に影響をとどめるインダストリーは南関東から中部地方、富山県より西方、少なくとも岡山県方面にも認められている。従って、頭無遺跡は、システムＡの勢力圏の縁辺に位置するとともに、これより西方へのシステムＡの文化要素進出の前線基地としての意味をもつのである。

（２）

頭無遺跡のシステムＡは、細石刃核製作において、まず第一に両面加工のブランク（最終的な石器の形態をつくるのに先立って、定形的な形態を用意したもの）を用意し、その長軸方向に縁辺を剥離して打面を設ける基本に則っている。但し、北海道から山形県の角二山遺跡にみられるがごとく、いわゆるスキースポールを数多く剥離する（システムＡⅠ）ということは、なかったようである。即ちシステムＡⅡであり、新潟県月岡、荒屋遺跡と似ている。しかし、この二遺跡は、スキースポールを全くつくらないわけではなく、頻度は低いがあることはある。頭無もまたスキースポールと一切無縁であると連断するのは暫くまつこととしたい。

本遺跡出土の典型的な細石刃核は（図１）ブランクに打面を設けただけにとどまり、細石刃の剥取に進んでいない状態を示す。しかし、細石刃核は相当磨滅しており、細石刃を必要に応じて剥取するために持ち運びしていたことをよく物語っている。つまり、細石刃核のブランクは、本遺跡以外の場所で製作されて寄り道しながら持ち込まれたものと推定される。たしかに、両面加工のブランク１個の作製は、子供の頭大の塊から除々に段取りを踏みながら剥離を重ねて、ようやく掌中に入るほどの大ききに仕上げることができるのである。従って、その過程には大量の石屑が生ずるのであり、本遺跡はこれに相当する剥片類は殆ど見当たらない。多くの剥片類は後述の荒屋型彫器の製作などにかかわるものと考えられる。また、もしもブランクを本遺跡で作製するとすれば、重量のある大きな礫を持ち込まなくてはならなくなることを意味している。ところが、本遺跡は石材の産地から相当距離があるため、その運搬だけでも仕事量は膨大なものとなることとなり、現地でブランクを作って効率良く運搬していた合理性が理解しうる。

システム A と不即不離の関係を有するのが荒屋型彫器である。本遺跡の荒屋型彫器は、石材に頁岩を用いることをはじめとして、形態も全く典型に合う。つまり、外形と大きさそしてグレーパーファシットが主要剥離面にねじれ加減である点などがその主たる要素となる。この機能、用途については多くの研究者が取り組みながらも、依然として解明は進んでいない。荒屋型彫器のなかには、図 3 のごとく、グレーパーファシットの幅を限定しようとする細加工が認められ、用途との関係が見究められねばならない。また、多くの場合、グレーパーファシットの主要剥離面側の縁辺に摩痕あるいは刃コボレが認められる。本遺跡においても実体顕微鏡などによる観察が必要であろう。これに関連して、グレーパーファシットの再生によって生ずるスポールの観察が重要である。スポールはグレーパーファシットが使用によって刃が潰れるなどして、鈍化したときに、起死回生策として、古い刃が取り除かれることであり、いわば古い刃即ちスポールにこそ最も使用によって生じた磨痕や刃コボレが残されているのである。スポールの観察分析の重要たる所以である。

細石刃の先端が鋭く尖るのは、システム A の特徴の一つである。システム B の円錐形石核から剥取される細石刃の全体が細長い短冊形を呈し、先端が尖らないことと対照的である。また、荒屋遺跡においては、その先端が更に「ノ」の字形に曲がる特徴的な癖を示すものが少なくない。本遺跡ではどうか、検討の要がある。ざっと見渡した限りでは、殆ど目につかなかった。さらに細石刃に細加工をもつ例がある。数例とも右側縁のみに施されているが、荒屋例と共通する。なお、荒屋例には、先端の主要剥離面の右縁辺にのみ、部分的に細加工を施す特徴がある。しかし、本遺跡例には見当たらない。今後の分析が進められねばならない。本遺跡の石器群の大部分は頁岩で作られている。加えて、黒曜石、黒色頁岩等が僅かに含まれる。いずれの石材も本遺跡付近あるいは群馬県内には見られないものであり、遠方より入手されたものである。黒曜石の原産地同定の研究は相当進んでいるので、その分析に供す

べきであろう。最も大量に必要とした頁岩は新潟県、山形県、福島県方面からもたらされたものであり、この頁岩が北からのシステム A の南下と密接に関係するものと考えられる。

黒色の粘板岩の薄い剥片の周縁に細加工を施した石器について、その表面がハジケて剥落したクレーター状の痕跡を示す点が注目される。あるいは加熱して剥離作業をするという方式も考えられるところであり、荒屋遺跡にも例がある。

(3)

頭無遺跡の石器群は、とくに狭い範囲に集中する、いわゆるユニットがある。それが同時に存在したものではなく、幾度かの滞留移動の中で残されたユニットである。それ故今後、群馬県内で頭無と同じインダストリーの発見が期待される所である。

本遺跡のユニット群の相互の内容の比較検討は今後もっとも期待される分野である。一つには、同一母岩別がユニット間にどのように分布するかを見極める必要がある。接合資料があるかどうかについては、相当の時間とエネルギーが見積らねばならず、それに対処し得る足る時間的余裕が整理作業から本報告書作成までに確保されることを強く希望し、期待するものである。

柳久保遺跡群頭無遺跡の全貌は、第Ⅲ期旧石器文化の在り方を解明する上で重要であるばかりでなく、旧石器文化終末から縄文文化開幕という日本列島先史時代文化の最初かつ最大なる歴史的事件の解明にもかかわって重要であり、その内容の充分なる検討と報告の期待されるところが大きい。

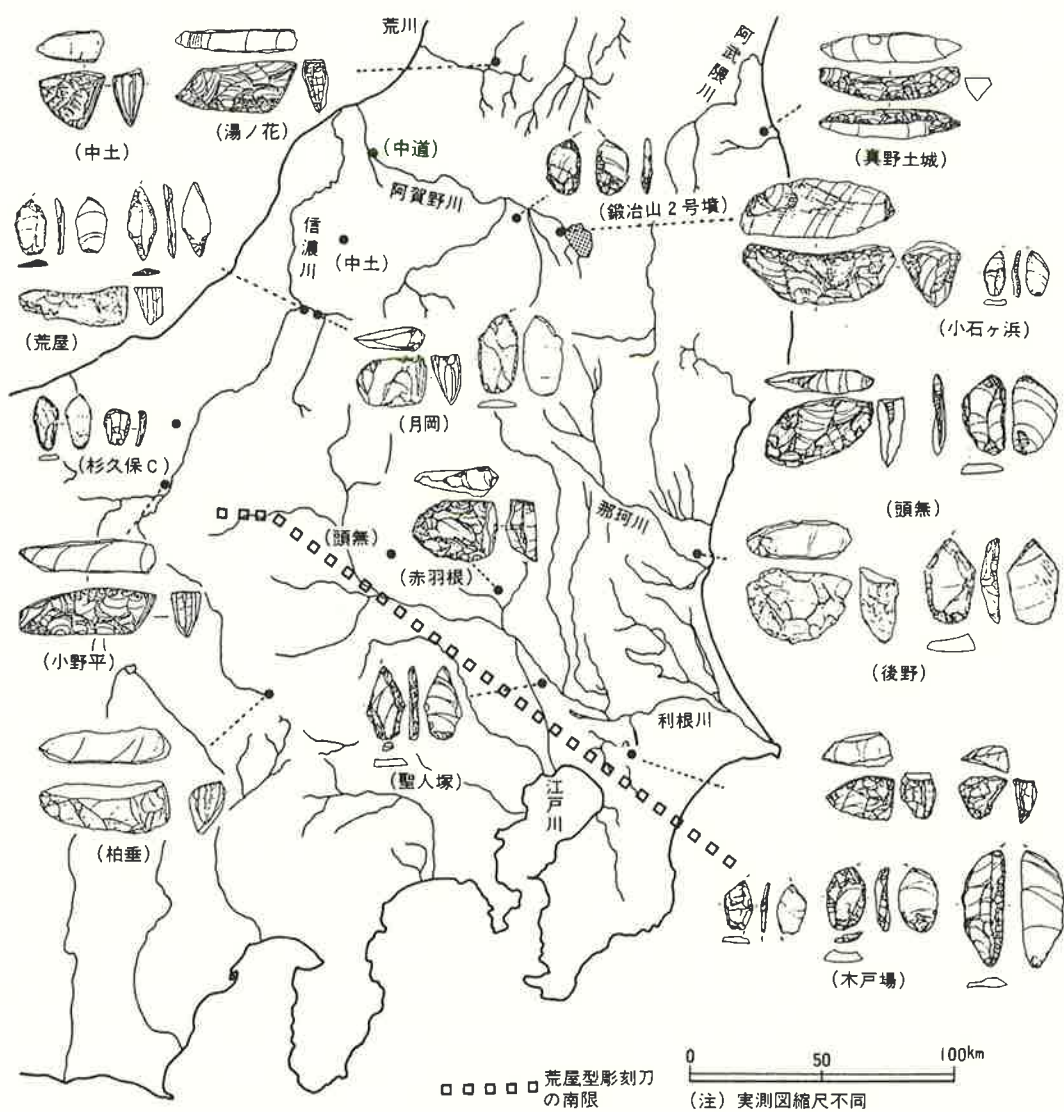


図1 頭無遺跡と関東を中心とした関連遺跡（橋本勝雄 1988 を一部改変）